

新資料 紀州東照宮の服飾類 中

紀州東照宮服飾類調査報告 一

神谷榮子

D

D-1 伝頼宣所用

紅地金入縹珍桃文様陣羽織(図版IⅡa、挿図13、台帳では「羽織二」のうちの『赤地唐織』) 極上の裂地を表裏共裂の無双仕立にした袷の陣羽織で、丈は背縫のところまで六五センチ、背肩幅は四二センチ、襟肩アキ×2は二一センチ、襟幅九・五センチ、袖ぐり後三三センチ、前三四センチ、重量は三二〇グラム。これらの法量が示すように、この陣羽織は小ぶりで、一三・四歳の少年用であり、重さも軽い。損傷や褪色が殆どなく保存状態も極めてよい。陣羽織の形態は一見して桃山時代の南蛮服飾の影響が明らかで、曲線裁断の前身頃、後身頃、襟、真田紐風の黒縁飾り、金モール紐の襟首どめ等、裁断と仕立ての随所に南蛮服飾の自由な採取が見られる。

裂地は明製の舶載品と思われる金入縹珍^{註10}、紅の縹子地(経糸・緯糸共に純度の高い紅染^{註11}、経の五枚縹子地)に、平金糸(金箔糸)と、白、黄、黄土がかった黄、薄萌黄、萌黄、浅葱、灰色がかった浅葱、極薄紅^{註12}、薄紅^{註13}、黄土色、茶の一色の絵緯^{註14}の計一二色で文様が織り出されている。

文様は、頂に金糸であらわされた丸文を持つ桃の折枝が、配色を巧妙に変えて互の目に置かれている。文丈は一九・五センチから二〇センチ、窠間幅は一一七

センチ。二つ巴文風の丸文は、恐らく中国の瑞文であろう。金糸で織り出されたその瑞文と長寿を表象する桃文とを組み合わせた中国の吉祥文様と考えてよいであろう。桃の折枝には、生氣に溢れた伸びやかな葉蔭に、花と蕾が実と同様の側面からの文様で愛らしく生き生きと付されている。そしてその大らかな桃の実は、何と、相当量の虫喰いのあとが巧みな便化で面白く表現されている。逞しく育って見事に成人し、泰然と世に処して事を成し、長寿を全うするといった吉祥文様の意味がこの陣羽織の裂地を通して窺われるようである。そういった文様が華麗な色調で、金入紅地縹珍という贅沢な極上織物で表現されている。その贅をこらした裂地を裏裂にまでも用いた無双仕立にして少年用陣羽織としたとは、当時の頼宣にとって、最高にして最適の戦陣用衣料を着用したことになるであろう。

(裂地の地合、縫糸)

前述のように地は経の五枚縹子で、経糸(S撚)、緯糸(二本引揃え)共に極めて純度の高い紅染。密度は、一センチ間に、経糸は一〇〇本前後、緯糸は三〇越前後である。絵緯は前述のように一二色で、金糸は約〇・三ミリの太さの揃った平金糸で一センチ間に一五本前後入っている。地揃みである。

縫糸は紅のZ撚絹糸で、黒の真田紐風縁飾りの縫付けには黒のS撚絹糸が用い

挿図13 伝頼宣所用
紅地繻珍桃文様陣羽織 (D-1) 背面

挿図14 伝頼宣所用
麻単陣羽織 (D-2) 部分

D-2 伝頼宣所用
麻単陣羽織(図版II b、挿図14、台帳では「羽織二」のうちの『高宮麻^{註15}』晒してない苧麻を単仕立にした粗い織目の、裁断も仕立も大ざっぱな陣羽織である。丈は背縫のところでは八二センチ、背肩幅は四八センチ、袖ぐりは前後とも四三センチ、重量は九五グラムと極めて軽い。最上層衣としての陣羽織ではなく、上質の陣羽織の下に襲ねて着たものではないだろうか。形は襟も身頃も南蛮の影響の濃い曲線裁断である。襟付の傍には三つの穴かがりがしてある釦穴と、同色のなめし革で包まれたくるみ釦がついている(挿図14)。正保三年(一六四六年)正月十五日の付紙(挿図15)があり、解説すると次のようになる。^{註16}

正保三年戊正月十五日ニ被_レ為_レ成ニ

御覽改_ニ候御極ノ内 御幼少之御
時分之内御□□御はをり
き色ひとへ

頼宣公御幼少の頃のものだと書かれているが、この陣羽織がD-1にくらべ多少大きいようであるので、若い頃所用の衣料という意も含んでの御幼少の時分云々ということであろうと考えられる。正保三年は頼宣数え年の四五歳であり、大坂陣出陣の折の衣料もそれより多少後年のものもまとめて幼少時

挿図15 伝頼宣所用麻単陣羽織
(D-2)と浅葱平絹頭巾(D-3)
の付紙

挿図16 伝頼宣所用浅葱平絹頭巾
(D-3)のaは側面、bは背面

a

b

c

挿図17 aはレンブラントのトゥルブ博士の解剖(1632年)部分、b cはヴァンダイクの肖像画

分或は若い時分のもので、称したのであろう。肩幅等から見ても成人男子用であるこの陣羽織は頼宣の青年時代の所用と考えて妥当である。前出(D-1)の大坂陣の折の少年用とこの成人用と二領の陣羽織が伝えられているのは意義深い。

(裂地、その地合、縫糸)

裂は裾に近いところに前身頃、後身頃共に織耳から織耳までの一幅が出ており、裂幅は三六・五センチ。裂地の密度は一センチ間に、経糸が二四本前後、緯糸が一六越前後。縫糸は白の絹糸で、燃はS燃とZ燃の両方があり、二種類の白絹糸が用いられている。

D-3 伝頼宣所用

浅葱平絹頭巾(挿図16 a b、台帳では「頭巾浅黄羽二重」とある)兜の下につけたと思われる南蛮風の頭巾である。頭部は高さ二〇センチ、底辺一五センチの二辺が弧を描いた三角形の裂を四枚接ぎにした帽子になっており、額には最長幅三センチ、長さ一四センチのつばがついている。垂れは五片の裂で出来ており、頭部の裂と首の上部に位置するところに計四ヶ所、それぞれ三センチの重なりで縫いつけられている。五片の垂れは、後(後頭部から後首、背の上方を覆う部分)は短くて長さが一七・五センチ、前(両眼の脇から耳や咽を覆う部分)は長く、前合わせの部分の長さが二三センチ、両肩にかけての垂れはその中央部の長さが一八センチと、後から前にかけて自然に曲線を描いて長くなっている。五片の重なり分は着装時に肩先が充分覆われるよう配慮され、五片の裂は、拡がった先端の幅が、背面の一枚が二八・五センチ、両肩が双方とも二二・五センチ、両前が双方とも三〇・五センチとなっている。後頭部中央に八センチの長さで風穴があけてあり(挿図16 b)、頭頂と垂れの前合わせには共裂の浅葱平絹で包んだくるみ釘がついている(挿図16 a)。縁飾り及び頭部と垂れの部分との接ぎ合わせの縫目には黄土色の真田紐風の飾り紐(幅一・一センチ、縁飾りは二つ折りにしてくるみである)が用いられる。頭部裏側の四ヶ所の接ぎ目には黒い真田紐風の飾り紐が付してあったようであるが、朽損して現在はその断片が四ヶ所に見られるだけである。この頭巾は表裏共裂で作られており、その裂の損傷部分から窺えるのであるが、全体に白い和紙の芯が入っている。頭囲りは明確には測定出来ず五八センチから六〇センチ、重量は五〇グラムである。この頭巾にも前出D-2の陣羽織同様正保三年正月十五日の付紙(挿図15)がある。解説すると次のようになる。^{註17}

正保三年正月十五日ニ被_レ為_レ成_二

御覽改_二候御極ノ内 御幼少之

御時分之内

御ずきん浅黄ノちやう

(裂地の地合、縫糸)

表裏共裂で、茶宇^{ちやう註18}といわれる先練先染、目のよくつまった平織の上質の裂が用いられている。藍の先染、経糸と緯糸は、糸の染、太さ共に殆ど同程度。平織で、織目はよくつまっており、密度は一センチ間に、経糸は三六本前後、緯糸は三五越前後である。縫糸は白S燃絹糸、黄土色の飾り紐の縫付けには黄土色S燃絹糸が用いられている。

D-4 伝頼宣所用

白地牡丹唐草文緞子襷襟(図版

III a IV a 向って左、台帳では襟

巻、「襟巻三 白綸子両面二、緋

紗綾ケン縮緬一」と記載されているうちの『白綸子両面二』の一つに該当する)

先にも(美術研究三〇六号)の「二 紀州東照宮蔵服飾類の伝来概要」の中で述べたように、南蛮風俗図等に屢々見られる西欧で十六世紀から十七世紀初頭にかけて流行した襷襟(挿図17、18)で、英語でラフ ruff、フランス語でフレイズ fraise といわれ、上衣の別襟という小さくて軽い物品であることと消耗の著しい襟部の

挿図19 伝頼宣所用
白雲文緞子鎧下着(D-7) 背面

挿図18 南蛮屏風 部分

大阪・南蛮文化館蔵

衣料部品であることが相俟って現存遺品資料は極めて少く、昭和四九年一〇月の筆者の発見でこの三点が確認されるまでは世界に僅か二点、イギリスのビクトリア・アルバート博物館 (Victoria and Albert Museum) とスイスのバーゼル博物館 (Basel Museum) に各一点存在するのみであったのである。^{註19}

この白地牡丹唐草文緞子の襷襟は三点の中ではこの一点だけが大きく、襟首囲り部分の裂の長さが四七センチ、首囲りに当る釦の位置からループの位置までの長さが四四センチとこれは成人男子の首囲りで、襟の高さが一〇・五センチ、襷部分の幅は一四・五センチである。重量は八六グラム。襷襟三点のうち、これは格別に仕立てが丁寧で、襷部分の端は外側に細く堅く擦って糊づけしてあり、更にその端をスカラ縫風の巻縫で一定の長さよりは伸びないよう固定してあり、立襟部分と襷部分との接ぎ目の上には捻金糸三本引揃えの三つ組紐金モールが両面ともに接ぎ目の上に当って飾ってあったり、くるみ釦(径一・五センチ)も黒絹子でくるんである上に捻金糸二本引揃えを平織式に組んで飾ってあったり、他の二点の仕立てや装飾に較べ一段と凝ってあることが認められる。襷部分の両端(前で合わさるところ)は〇・四ミリ幅の三つ折縫で一ミリ程のこまかい針目の平縫である。三つ折縫の折りの方向は外側、従って着装時その端は平たい側が表に出るようになっていいる。立襟部分の下端は輪奈になって裏面にまわっており、芯裂は入っておらず極めて柔らかな立襟である。

(裂地、その地合、飾り糸、縫糸)

この襷襟に用いられている裂地は一種類だけで、その裂地は写真(図版Ⅲa、IV a)で見られるように牡丹唐草文緞子である。文丈は一五・五センチ前後、窠間幅は九・七センチ、牡丹の長径は七・五センチ、短径は五・五センチ、地合は、経の五枚絹子地で、一センチ間の密度は、経糸は一一〇本前後、緯糸は三二越前後である。金モール紐とくるみ釦の捻金糸は金の色が赤味を帯びている。釦の受けのループは白絹の三つ組紐が用いてある。

縫糸は白乙擦絹糸。

D-5 伝頼宣所用

赤地紗綾・縮緬襷襟(図版Ⅲb、IV aの中央、台帳では襟巻、「襟巻三 白絹子

両面二、緋紗綾ケン縮緬一」と記載されているうちの『緋紗綾ケン縮緬一』に該当する)

この赤い紗綾と縮緬で出来ている襷襟は次に挙げる白地雲文緞子の襷襟と大きさがほぼ同じで、小ぶりである。少年用に仕立てたものであろう。襟首囲り部分の裂の長さが四〇センチ、首囲りに当る釦の位置からループの位置までの長さが三七センチ、襟の高さが一〇センチ、襷部分の幅は一一センチである。重量は四八グラム。襷部分の裂が縮緬で、その襷の端は他の二点とは異り、裂の耳がそのまま利用されている。襷部分の両端(前で合わさるところ)は撚りぐけで、白緞子二点(D-4、D-6)のその部分が三つ折縫になっているのとは異なる。撚りの方向は白の二点と同様外側、即ち着装時襷部の端は平たい側が表に出るようになっている。立襟部分の裂は紗綾で、D-4の襷襟同様、襟の下端は輪奈になって裏にまわっており芯なしの柔らかな立襟である。立襟の釦留は始め三ヶ所であったように、釦三個、それをほめるループ三個のそれぞれ中央の一個分の組が、とれたのかとったのか不詳であるが欠損していてその痕跡だけが明らかに見られる(図版Ⅲb、IV a)。くるみ釦は径一センチで共裂の紗綾で包み、周りに捻金糸四本引揃えのモール飾りが施してある。襷部分と立襟部分との接ぎ目には、〇・三センチ間隔の押さえ縫が平縫で行われており、D-4の襷襟に見られるような飾り糸は施していない。紗綾にも縮緬にも処々に黄色の褪色がある。双方とも紅染ではなく、他の赤の染料であらう。

(裂地、その地合、飾り糸、縫糸)

赤地紗綾 紗綾形に牡丹文様の紗綾で後染、紅染ではなく他の赤い染料で染めたもの。^{註20} 文丈は一六・五センチ、窠間幅は七センチ、牡丹の花は長径が五・五センチ、短径が四センチ、紗綾形の大きさは紗綾形の基本単位の長さが五・五センチ、組織は地は平で文様が経の四枚綾、密度は一センチ間に、経糸は四八本前後、緯糸は三六越前後である。

赤地縮緬 紗綾の部分と同様に紅染ではなく他の赤い染料で後染したもの。^{註21} 密度は一センチ間に、経糸は五六本前後、緯糸は三〇越前後である。

くるみ釦を飾っている捻金糸は、その芯に紅絹糸が使用してある(D-6の襷

襟の捻金糸も同様)。その捻金糸を四本引揃えてくるみ釦の周囲にかがり留めてあるが、そのかがり方はスカラ縫風で、かがり糸は萌黄Z捻絹糸である。釦の受けのループは紅絹の三つ組紐が用いてある。

縫糸は赤S捻絹糸。

D-6 伝頼宣所用

白地雲文緞子襷襟(図版Ⅲc、IVa)向って右 台帳では襟巻、「襟巻三 白綸子 両面二、緋紗綾ケン縮緬一」と記載されているうちの『白綸子両面二』の一つに該当する)

この白地雲文緞子襷襟は次に記載するD-7の鎧下着と共裂で、大きさから判断しても共に少年用に仕立てられた小ぶりのものであるからこれらは組になるものと考えられる。襟首囲り部分の裂の長さが三九センチ、首囲りに当る釦の位置からループの位置までの長さが三六センチ、襟の高さが一一センチ、襷部分の幅は一五センチである。重量は七六グラム。襷部分の端は細く堅く撚って糊づけしであり、更にその端をスカラ縫風の巻縫で一定の長さよりは伸びないように固定してあるのはD-4の襷襟と同様な方法であるが、D-4の方が仕事が入りである。襷部分の両脇(前で合わさるところ)は〇・四ミリ幅の三つ折縫であるのはD-4の白地牡丹文緞子と同様な方法である。立襟部分と襷部分との接ぎ目にはD-5の赤地襷襟と同様な方法で押さえ縫がしてある。〇・二センチほどの間隔で赤地襷襟よりは細かい針目である。くるみ釦は径一・一センチで、共裂で包んであり、D-5の赤地襷襟と同様その周囲を捻金糸四本引揃えのモール飾りが施してある。三個のくるみ釦のうち中央のは捻金糸三本(四本のところもある)引揃えの平織風網代組で包んである。立襟部分の下端はD-4、D-5の襷襟同様輪奈になって裏面にまわっており、芯裂は入っておらず極めて柔かな立襟である。

(裂地、その地合、飾り糸、縫糸)

この襷襟に用いられている裂地は一種類だけで、D-7の鎧下着と共裂であり、写真(図版Ⅲc、IVa、b)で見られるように雲文緞子である。文丈は一一センチ前後、窠間幅は九・七センチ、地合は、経の五枚縹子地で、一センチ間の密

度は、経糸は一四〇本前後、緯糸は三四越前後である。

くるみ釦を飾っている捻金糸は、釦の縁飾りも中央釦の網代組のもその芯に紅絹糸が使用してある(D-5の襷襟の釦の縁飾りの捻金糸同様)。釦の縁飾りはD-5の襷襟同様、捻金糸を四本引揃えてくるみ釦の周囲に、萌黄Z捻絹糸でスカラ縫風にかがりつけてある。釦の受けのループは白絹の三つ組紐が用いてある。

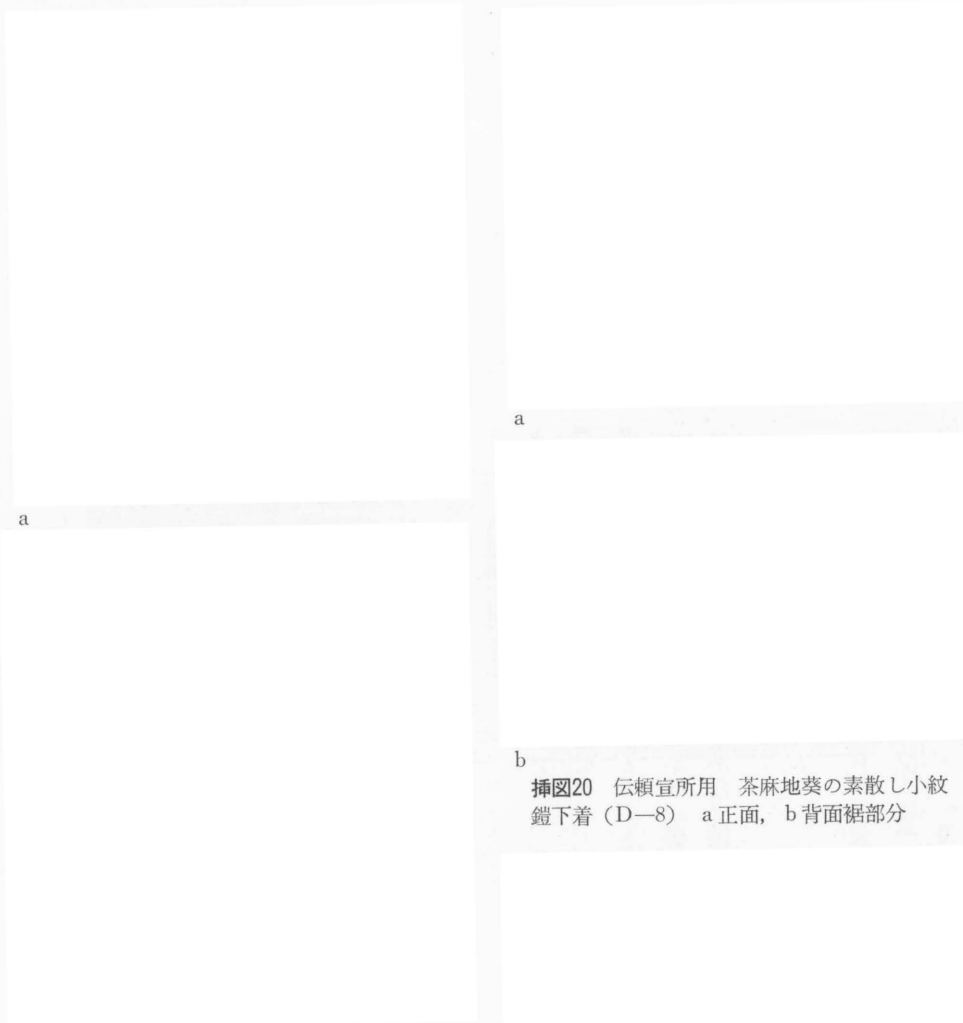
縫糸は白Z捻絹糸。

D-7 伝頼宣所用

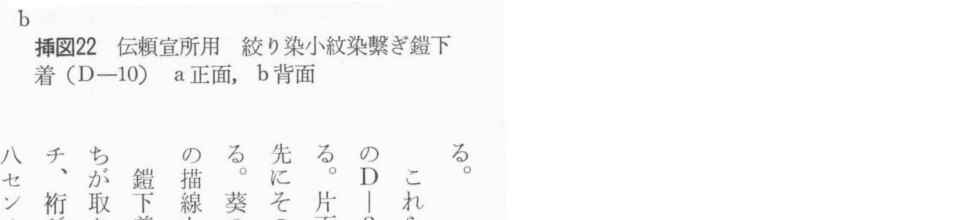
白地雲文緞子鎧下着(図版IVb、挿図19、台帳では「下着六 表綸子裏紅、晒茶小紋葵ノ葉散シ、晒腰ヨリ上ククシ葵紋散シ腰ヨリ下薄柿割菱散シ、晒牡丹唐草小紋柿染、晒浅黄小紋、晒浅黄襟縹子」と記載されているうちの『表綸子裏紅』に該当する。)

この白地雲文緞子鎧下着はD-6の襷襟と共裂で作られており、大きさは丈が背縫のところまで六七センチ、裾が五二センチ、襟肩アキ×2は一三センチ、袖口が一〇センチ、背面脇下の位置の背幅が四八センチと小ぶりの鎧下着であるから、同様に小ぶりでこの鎧下着と共裂のD-6の襷襟とは組になるものである。襟は幅(高さ)が九センチの立襟で、袖は別袖でなく一枚の裂から身頃と袖を続けて裁ち出している。即ち前後とも左右それぞれの身頃と袖が一枚の裂から続けて裁ち出している。肩から上腕、肘、手首にかけての裁断は、身体の線に沿った曲線が顕著で、袖口から腋下、身頃の両脇にかけても大きく刳ってあり、曲線裁ちが目立っている。

袷仕立て裏は紅平絹、後首から背にかけて汗のため色が褪め黄色になっている。重量は一八〇グラム。左身頃の前あきのところには、襟付から一八センチ下った位置から下方に、九センチ幅、長さ四四・五センチの共裂の紐がついており(縫目が上、輪奈が下になって)、右身頃の背面には、脇縫から五センチ入った位置で肩の縫目から二七センチ下ったところに紫なめし革の紐(〇・三センチ幅で長さ三・五センチ一つ結んである長さが一)の乳が付いており(挿図19)、着装時に左前身頃に付いている共裂の紐を右脇から後にまわし右後身頃のこの乳に通して前合わせの形を整えたことが窺われる。



挿図20 伝頼宣所用 茶麻地葵の素散し小紋
鎧下着 (D-8) a 正面, b 背面裾部分



挿図22 伝頼宣所用 絞り染小紋染繋ぎ鎧下
着 (D-10) a 正面, b 背面

挿図21 伝頼宣所用 赤茶麻地牡丹唐草小紋
鎧下着 (D-9) 正面

D-8 伝頼宣所用
茶麻地葵の葉散し小紋鎧下着(図版V a、挿図
20 a、b、台帳では「下着六」として列記してあ
る—D-7の解説一五頁下段照合—うちの『晒茶
小紋葵ノ葉散シ』に該当する。)

鎧下着六領のうち前出D-7の白地雲文緞子鎧
下着以外の五領は何れも小紋型を使用して染めた
上布製である。恐らくこの五領の小紋染に使用さ
れた型紙は伊勢型であろうし、伊勢は和歌山藩の
領地であり、伊勢型の保護奨励に努めた初代藩主
自身の衣料であるから更に意義深い資料ともいえ

る。
これら五領の小紋染のうち型の継ぎ目が最も明瞭にわかるのはこ
のD-8の葵の葉散し文様ので、文様一かえりが一四センチであ
る。片面糊置の引染め(挿図20 b参照)で、散らし文様の葵の葉は、
先にその部分の糊置防染を行い、その後で地紋の糊置きを行ってい
る。葵の葉の線書きは紋所の場合と同様に水洗が終り、乾燥させ墨
の描線を入れている。

鎧下着としての形は当時の鎧下着によく見られる南蛮風の曲線裁
ちが取り入れられた衿や袖で、丈は背縫のところでは九二・五セン
チ、衿が六六センチ、袖幅は三三センチ、袖丈は袖付のところでは二
八センチ、袖口は一六センチ、襟肩アキ×2は一九センチ、襟は幅

(裂地の地合、縫糸等)

表裂はD-6の雲文緞子襷襟と共裂。

裏裂は紅染の羽二重のような平絹で、密度は一センチ間に、経糸は四六本前
後、緯糸は二八越前後である。

縫糸は白S撚絹糸で、針目は平縫が〇・二センチから〇・三センチ、くげ縫が

〇・五センチから〇・七センチ。

九センチで、裾幅は裾のところでは二〇センチ、三・五センチ幅一〇一センチの共
裂の紐が二本ついている。左脇の袖付下端より一〇センチ下った位置から下方に
六センチ幅の紐通し穴があけてある。襟首囲りの衿の先に径一・三センチの共裂
で包んだくるみ釦がついておりループで留めるようになっていた。重量は紐共で
二二〇グラム。単仕立。そのため裏面に両織耳の確認される個所が多く、裂幅は
三四センチであった。

(裂地の地合、縫糸等)

上質の上布で、密度は一センチ間に、経糸が二八本前後、緯糸が二六越前後、
経糸も緯糸もS撚。

縫糸は白Z撚絹糸と白S撚絹糸と両方が使われている。縫目は室町、桃山期の
帷子等、上物の麻織物の夏衣に見られる極めてこまかい針目^{註22}で、背縫は一ミリか
ら二ミリの細かい針目の平縫で縫代が割ってある。裾は一ミリ間隔位の細かいま
つりぐけ、くけ目も〇・五センチ間隔位で細かい。

D-9 伝頼宣所用

赤茶麻地牡丹唐草小紋鎧下着(図版Vb、挿図21、台帳では「下着六」として
列記してある—D-7の解説一五頁下段照合—うちの『晒牡丹唐草小紋柿染』に
該当する。)

D-8と同様に上布の鎧下着で、こちらの方が裂地が薄手である。D-8同様
片面糊置の引染めである。型継ぎはD-8より単位が大きく文様一かえりが一八
センチである。

鎧下着としての形は、上杉家に伝わった上杉神社蔵の景勝所用の鎧下着^{註23}に近
く、丈が短く、幅の狭い袖が付いており、南蛮風の裁断や仕立てが多くはないが
多少取り入れてある。丈は七三・五センチ、裾は五〇・五センチ、袖幅は一八・
五センチ、袖丈は袖付のところで一九センチ、袖口は一六センチ、襟肩アキ×2
は二・五センチ、襟は幅(高さ)が九センチの立襟^{註24}で、衽幅は裾で一七・五セ
ンチ、三センチ幅で長さ六二・五センチの薄浅葱平絹くけ紐(袷で芯はない)が衽
に縫いつけてある(挿図21参照、襟付から上前は二六センチ、下前は二四センチ下ったと
ころに)。紐の通し穴が左脇の袖付下端から七・五センチ下った位置より七センチ
幅下方にあげてある。^{註25}襟首囲りの上前衽の先端に紫平絹の釦(中に綿か裂が包みこ
んである坊主玉)が紫なめし革をつけて襟付に通し結び留めてある。受けのループ
は紫なめし革である。重量は一四八グラム。単仕立。裂幅は三四センチ。

(裂地の地合、縫糸等)

上質の比較的薄手の上布で、密度は一センチ間に、経糸が二五本前後、緯糸は
二〇越前後。経糸も緯糸もS撚。

縫糸は白S撚絹糸。縫目はD-8の鎧下着同様極めてこまかい針目である。襟
付は細かい針目の袋縫で、縫代が〇・三センチ位で細かい。衽付も裁ち目のとこ
ろはすべて同様な袋縫になっている。

D-10 伝頼宣所用

麻地葵紋散し絞り染・割菱散し小紋染繫ぎ鎧下着(図版Vc b、挿図22 a、
b、台帳では「下着六」として列記してある—D-7の解説一五頁下段照合—う
ちの『晒腰ヨリ上ククン葵紋散し腰ヨリ下薄柿割菱散し』に該当する。)

D-8、D-9と同様に上布の鎧下着で、腰からは白地に紅の葵紋散しが辻
ヶ花風な縫締絞りであらわしてある絞り染で、腰からは割菱が散らしの薄樺色
小紋染で、その形態は現代という繫ぎである。即ち上体衣とズボン形の下体衣と
が繫ぎている衣類で現代では工場等での作業衣として屢々用いられている。D-
10の鎧下着の場合は、上半と下半の裂地を替えて、上半の襦袢を白地に紅で葵紋
を散らした絞り染、下半の袴下を薄樺色の地に白で極めて細かい霰に小花小紋に
割菱(四つ割菱)散しの小紋染と、裂地は同じ上布ではあるが、色も文様も染法
も異なる裂を用いている。現代のものを除いてわが国の衣類にこのような繫ぎがあ
ったのを知ったのは始めてで、これまで遺品資料には勿論のこと、絵画資料、文
献等にも見当らなかつたものである。

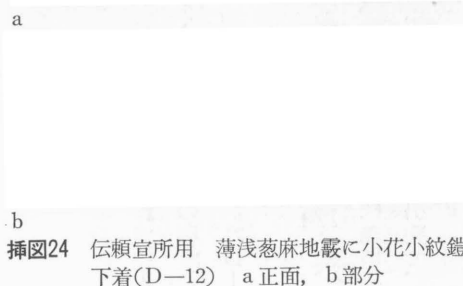
写真でも見られるように発汗のしみあとが生々しく実戦に供されたことが偲ば
れる。

紋の上体衣は、葵の丸紋の径は外径が四センチ、内径が三センチで、辻ヶ花風
の縫締絞りであらわされているが、平縫締の針目が二ミリ前後で辻ヶ花より大分
大きく、従って輪郭線の明瞭さに欠けている。丸紋の薄紅色はやや褪色している
が紅染と思われる。葉柄はD-8の葵の葉の線書き同様染め上った後、墨で線描
きしている。

型染の下体衣、即ち袴下は、割菱の縦(高さ)が八センチ、横(幅)が一センチ
で、その割菱の部分は先にその部分の糊防染を行い、その後で地紋の糊置を行
っている。片面糊置の引染で、型継ぎの跡が明らかでなく文様一かえりの大きさ
は不詳。



挿図23 伝頼宣所用 薄浅葱麻地霰に小花小紋
鎧下着(D-11) a 正面, b 部分



挿図24 伝頼宣所用 薄浅葱麻地霰に小花小紋鎧
下着(D-12) a 正面, b 部分

縫糸は白S撚絹糸。縫目はD-8、D-9の鎧下同様極めてこまかい針目で、縫代が〇・三センチほどの細い袋縫や縫目が〇・一センチほどの細かいまつりぐけ、三つ折縫が多い。ただ紐付は二目落しの付け方で、その間隔は二センチ前後と大きい(その縫糸は白S撚絹糸二本どり)。

D-11 伝頼宣所用

薄浅葱麻地霰に小花小紋鎧下着(挿図23

a、b、台帳では「下着六」として列記してあるD-7の解説一五頁下段照合1-うちの

『晒浅黄小紋』に該当する。)

D-8、D-9、D-10と同様に上布の鎧下着で、よく着用されたものと見え、次のD-12とこの二領は薄浅葱の色も薄れて白に近くなっており、霰に小花小紋の文様も一見したところでは見極め難い。片面糊置で薄藍に浸染したものとされる。型継ぎも明らかでなく文様一かえりも不詳である。

鎧下着としての形は前述したように繋ぎ形として唯一で、また上体衣も下体衣も南蛮風の曲線裁ちが多く取り入れられており、下体衣の袴下はカルサン風である。丈は上半が背縫の位置で五〇センチ、下半は七二センチ、加えて一二二センチである。衿は六三センチ、袖幅は三二センチ、袖丈は袖付のところで二六センチ、袖口は一九センチ、襟肩アキ×2は一四センチ、襟幅は九・五センチ、袴下の裾幅は二〇センチ。五センチ幅の裂いたままの上布の単の紐が、上下接ぎ目の縫目が紐幅の中央になるように上前七・五センチ幅、下前八センチ幅の縫代で付けてある。その縫付部分の縫代別で長さは上前が九三センチ、下前が九一センチ。左脇の袖付下端より一一センチ下った位置から一四センチ幅の紐通し穴があけてある。上前の襟首囲りの衿の先には釦の欠失したあとが見られ、下前のその位置には径一・二センチの青色繻子で包んだくるみ釦(白S撚絹糸で縁飾りが施してある)がついているが、留は見当らず、その跡も不詳である。重量は二三〇グラム。単衣仕立。裂幅は上体衣も下体衣も三三センチから三三・五センチ幅。(裂地の地合、縫糸等)

上質の上布で、密度は上体衣が一センチ間に、経糸は二六本前後、緯糸は二八越前後、経糸、緯糸共にS撚、下体衣が一センチ間に、経糸は三二本前後、緯糸が二八越前後、経糸、緯糸共にS撚。

鎧下着としての形は、次のD-12と殆ど同形で、このD-11には共襟がついている。D-9とも同類である。丈は七二センチ、衿は五二センチ、袖幅は一九センチ、袖丈は袖付のところで一九センチ、袖口一四・五センチ、襟肩アキ×2は一三センチ、襟は幅(高さ)が九センチの立襟で、衿幅は裾で一六・五センチ、二センチ幅で長さ六二センチの紫平絹くけ紐(袷で芯はない)が衿の襟付から上前下前とも二五センチ下った位置に縫いつけてある。紐の通し穴が左脇の袖付下端から九・五センチ下った位置より六・三センチ幅下方にあけてある。襟首囲りの上前衿の先端に紫なめし革の釦(D-9と同様の中に綿か裂が包みこんである坊主玉)がついており、その受けのループは、下前の襟首囲り右肩山から六センチ下ったところに紫なめし革で二・五センチの長さでついている。重量は一二〇グラム。単仕立。裂幅は三四センチ。(裂地の地合、縫糸等)

b
挿図27 伝頼宣所用 薄浅葱地牡丹唐草文紗綾袴下及び同片身 (D-15), aは袴下(背面), bは片身

a

挿図25 伝頼宣所用 格子麻単袴下 (D-3) 正面

a

b

挿図26 伝頼宣所用 紅地平絹鍔下着に紅地平絹袴下 (D-14) aは鍔下着を背縫位置で二つ折りに畳んだもの, bは袴下正面

上質の上布で、密度は一センチ間に、経糸が二八本前後、緯糸が二六越前後、経糸も緯糸もS撚。縫糸は白S撚絹糸。縫目はD-8、D-9、D-10の鍔下着同様極めてこまかい針目で袋縫や三つ折縫等の縫代も〇・三センチ位の細さで丈夫に丁寧に仕立てる。

D-12 伝頼宣所用
 薄浅葱麻地霰に小花小紋鍔下着(挿図24 a、b、台帳では「下着六」として列記してある—D-7の解説一五頁下段照合—うちの『晒浅黄襟縹子』に該当する。)

挿図28 伝頼宣所用 紗綾紐(D-17) 上の向って左より(i), (ii), (iii) 下の向って右が(iv), 向って左が(v)

現状は一見したところではD-11と襟の有無だけの違いぐらいで、形状、小紋の文様や色、使い込みようまで殆ど同じである。このD-12には現在では襟が除かれていますが、台帳では「襟縹子」とあり、明治四二年

の台帳記載時期(本稿の上―美術研究三〇六号二八頁より二九頁上段―参照)には縞子の襟が付いていたことが知られる。丈は七一・五センチ、衿は五三センチ、袖幅は一九センチ、袖丈は袖付のところで一八センチ、袖口一四・三センチ、襟肩アキ×2は一三センチ、襟は欠損のため不詳、衿幅は裾で一五・五センチ。紐通し穴が左脇の袖付下端から一〇センチ下った位置より六センチ幅下方にあけてある。^{註29}紐と釦の類はなく、欠損したのか当初から無かったのか不詳。重量は一〇八グラム。単仕立。裂幅は三四センチ。

(裂地の地合、縫糸等)

D-11とは共裂と観察される。縫糸も白S撚絹糸で縫製もD-11と同様である。

D-13 伝頼宣所用

格子麻単袴下(挿図25、台帳では「股引三」として列記してあるうちの『高宮縞』に該当する。)茶、白茶、萌黄、紺、黄等の格子の麻地で単仕立にしてある小袴風の袴下である。晒し方の少い苧麻糸を数色使用して粗く織った格子縞で台帳に高宮縞とあるのは近江産の高宮麻の格子縞という意であろうが、D-12の麻単陣羽織がこの台帳で高宮麻といわれているのと同様に、高宮産を厳密にいうものではないから。近江の高宮で出来る麻織物の糸や織の風合が比較的硬直したものが多くところから、この台帳では麻織物として柔かく織目の密なもの晒、硬くて織目の粗いものを高宮麻と称したのではなからうかと思う。

大きさは丈が六八センチ、裾幅は二三センチで、その裾から脇線は太腰にかけて曲線で脹ませ、その最も太いところは三三センチである(右脚の前面の寸法)。両脇に二三センチの脇あけがあり、後(背面)の腰には幅二・二センチ、全長一九八センチのくけ紐が付いている。重量は一〇〇グラム。裂幅は三四センチ。

(裂の地合、縫糸)

晒し方の少い苧麻糸を粗く織ってあり、密度は一センチ間に、経糸は二四本前後(二本ずつ寄っている)、緯糸は一八越前後である。経糸はS撚、緯糸は撚が不詳。縫糸は黒S撚絹糸。

D-14 伝頼宣所用

紅地平絹鍔下着、紅地平絹袴下(挿図26、台帳にはこの紅地平絹鍔下着に該当するのが見当らず、袴下の方は「股引三」として列記してあるうちの『紅羽二重両面』というのに該当する。)一見したところ羽二重のような滑らかな紅染無地の衿の上衣衣と下体衣で、色調も裂地も共裂のようであり組になるものかと思われるが不詳である。上衣衣は襟なしで、前と後には、それぞれ二幅を接ぎ合わせた横裂が用いてあり、二枚の小幅の裂を接ぎ合わせることによって恰も大幅の裂一枚で裁断するように、袖山、肩山、首囲り、腋のくりと曲線裁断がなされている。上衣衣の鍔下着は丈が六一センチ、衿が六八センチ、重量は一五〇グラム。下体衣の袴下は丈が六一センチ、腰幅(腰囲の1/2)が三七・五センチ、重量は一六グラム。双方とも羽二重のような滑らかな平絹で、紅の後染、裏裂もそれぞれ共裂が用いてある。鍔下着の裂地の密度は一センチ間に、経糸が四八本前後、緯糸が三八越前後。袴下の裂地は鍔下着の裂地より経糸緯糸共に細く、密度は一センチ間に、経糸は五〇本前後、緯糸は四二越前後である。

D-15 伝頼宣所用

薄浅葱地牡丹唐草文紗綾袴下及び同片身(挿図27 a b、台帳では「股引三」として列記してあるうちの『浅黄紗綾縮緬』に該当する。)薄浅葱地の牡丹唐草文紗綾で作られた足首まで長さのある袴下で単仕立である。形は上杉神社蔵の謙信所用なめし草裁着袴(たつかけ)に近いが、謙信所用のは両脇があいていて腰の紐は前身と後身と別々に縫いつけてあるが、この袴は脇あけはなく後あきで、紐は前後続けてつけであり、後中心で合わせて締める形になっている。現在の股引(ももひき)に非常に近い形である。どういふわけか台帳にもない同種の袴下の片身があり併記しておく。丈は腰の紐付より下が九五センチ(片身の方もほぼ同じ)、裾の足首を包む裾口の長さが三〇センチ(裾幅一五センチ)、足首よりふくらはぎにかけての裾あきが一二センチ(片身の分も殆ど同寸法)、重量は一七〇グラム(片身の重量は四二グラム)。脚部にはふくらはぎの上下を縛る紐がついていたようで、右脚後に上に紫平絹組、足首に紫なめし草紐が残っている(挿図27 a 参照)

(裂地、その地合、縫糸等)

牡丹唐草文の紗綾で、この紗綾には珍しく地紋に紗綾形がない。^{註30}地が平で文が経の四枚綾、文丈は一九・五センチ、窠間幅は九・五センチ、牡丹の長径七・八センチ、短径六センチ。密度は一センチ間に、経糸は五〇本前後、緯糸は二六越前後。縫糸は水浅葱のS撚絹糸で、縫目は極めて細かく丁寧で、その揃い方は現代のミシン縫を凌ぐ見事さで、且つ手縫の風合が加わっている。

D-16 伝頼宣所用

紫地紗綾紋文様帯(図版VI a b、台帳の「上帯紗綾」が該当する)裂幅五四センチ一幅をそのまま使った長さ二八七センチの帯である。この帯が発見されるまで、紗綾の裂幅は不詳であった。紗綾の遺品資料は昭和二十年代までは豊国神社蔵品の豊臣秀吉所用といわれる胴服と尾張徳川家に伝わる家康所用小袖の中に三領確認されるぐらいであったが、昭和三年に東京芝の増上寺徳川將軍家墓の改葬時、二代將軍秀忠の副葬品の中から紗綾の小袖や夜着、座蒲団が発見され、次いで上杉家に伝来した謙信・景勝所用服飾類の中に袖無単が三領発見された。十点ばかりの紗綾の遺品資料に、今回紀州東照宮において家康所用の能装束帯(B-3)、頼宣所用の襷襟一点(D-5)、袴下一腰と片身一点(D-15)、上帯と称される約三メートルの紗綾裂(D-16)、紐五条と具足包み裂一枚(D-17)の計十一点が発見されたのである。そしてそれら新発見の紗綾には地紋に紗綾形文様のない種類のものが二種あったり、加えてこれまでは紗綾の裂幅が不詳^{註31}であったのが確認されるなどまことに意義深い内容であった。

写真で見られるようにこの紗綾の帯には縫締絞りによる白抜の円を散らした文様があり、その配列には何か意味がありそうな感がある。円の大きさは大きいものは外径が二・七センチから三・五センチ、内径が二センチから二・二センチで、小さいものは外径が二・五センチで内径一・五センチといったところ、円を描く白場は何れも〇・五センチ前後である。この縫締絞りはD-10の鎧下着の上半絞りと同様辻ヶ花訳であるが、平縫締の針目が二ミリ前後で辻ヶ花染より大きく、従って輪郭線が辻ヶ花染のように明確ではない。これだけ絞りの部分が多いのでどこかに縫い締めた糸は残っていないものかと当って見たところ、二ヶ

所確認でき、辻ヶ花染の縫糸と同様、苧麻の晒さない糸が使用されていた。ただ、辻ヶ花染に使用されている糸より幾分細めである。これらのことから辻ヶ花染の終りに近い時期の大坂陣の頃、縫締絞りの針目は大きくなり、使用糸は苧麻の晒さない糸ではあるが大きさがやや細くなったものを使用して縫ったり締めたり染め上ってから糸を抜く時の作業がそれまでの辻ヶ花染より安易な方向へ向っていたことが知られる。しかしその結果はD-10の鎧下着やこの帯の絞り模様で見られるように輪郭線が際立っていない。

地紋は紗綾型に牡丹の折枝文様である。この帯は一幅を幾重かに畳むか、しごくかして締めたものであろうが、皺や折目のつきにくい紗綾の地質のためか折目や皺の形跡は認められない。重量は一四六グラム。

(裂地、その地合)

紗綾形に牡丹の折枝の地紋がある紗綾で、裂の織始め部分もついている。織始めは四・五センチ間(図版VI a の下端)で、その部分は平織の無地。織始めから二八七センチの裂地が五四センチ幅そのまま使用してあり裂自体としてもまことに得難い資料である。文丈一一センチ(処々九センチ位のところもある)、窠間幅四・五センチ。紗綾形の基本になる部分の寸法は三・四センチ。地が平で文が経の四枚綾。経糸、緯糸共に太く揃っており、織目が程よくつまっている良質の裂地である。密度は一センチ間に、経糸が五〇本前後、緯糸は三五越前後である。

紫色の染色は色調等から紫根染と考えられる。

D-17 伝頼宣所用

紗綾紐(挿図28、台帳では「忍ノ緒 紗綾」と記載されているのに該当する)紅染の紗綾裂の四糸と薄浅葱紗綾の四糸が一条である。紅染の四糸は共裂で、薄浅葱の四糸は袴下と共裂である。何れも芯入である。

(4)紅地紗綾紐(挿図28、上の向って左、芯は真綿、幅四センチ、長さ二八三センチ、重量四〇グラム、地文は紗綾形地に蕨手文様、文丈は一六・五センチから一八センチ、窠間幅は不詳。紗綾形文基本の長さは八センチ、地合は密度が一センチ間に、経糸が四八本前後、緯糸が二七越前後である。縫糸は紅S撚絹糸、くけ目は〇・四センチから〇・五センチの針目。

の摺箔裂等が、頼宣大坂陣所用品として鏡櫃(挿図29の向って左)の中に納められ
伝えられて来た。

D-18 伝頼宣所用

摺箔裂袋八枚(図版Ⅶ、挿図31、32、33、台帳では「白袋九 紫地金摺込」と記
載されているのがこれに該当するのであろうか) 赤茶色や黄土色の練緯地に写
真で見られるような模様が摺箔であらわされた裂で作られている。現在八枚あ
り、鍬形や真向が納めてある葵紋付黒漆蒔絵箱(挿図30、箱の法量は一五センチ角
に高さ四センチ、葵紋の外径一〇・七センチ、真向の直径九・三センチ)に鍬形等の下
八枚が重ねて敷いてあり、その順序は今回始めて見た時次の順、即ち上層から下
層に(イ)~(チ)のように重なっていた。(イ)は縫糸が朽損して袋の輪奈のところか
ら挿図31のように展開でき模様が一目して判ったが、他の七枚は袋状になってい
る両面を合わせて見ると(写真では袋の輪奈の方向を一定にしているので、輪奈から上
部が片面、輪奈から下部がその逆面として合わせ見ていただきたい)次のようになる。

(イ)赤茶地鶴に網干文様摺箔(図版Ⅶ、挿図31、32)

(ロ)黄土地猪・宝尽し・立木・唐花襷仕分け文様摺箔(図版Ⅶ、挿図32)

(ハ)黄土地あじさい折枝文様摺箔(図版Ⅶ、挿図32、葉は赤味の多い金箔で、花の塊の一つ

——挿図32の色が濃く写っている分——は青味がかつた箔で銀箔か青漆であらうか)

(ニ)渦巻に木賊文様摺箔(図版Ⅶ、挿図32、渦巻が赤味の多い金箔である。)

(ホ)楓文様摺箔(挿図33 a・b、大きい楓の葉が赤味の多い金箔)

(ヘ)紗綾形地に一重蔓牡丹・唐花菱襷仕分け文様摺箔(挿図33 a・b、赤味の多い金箔)

(ト)すすきの原地麻の葉三つ巴文散し洲浜形に桜・麻の葉に雲文仕分け文様摺箔(挿

図33 a・b)

(チ)唐花菱つなぎ・紗綾形地に八重梅の丸文散し仕分け文様摺箔(挿図33 a・b、赤味
の多い金箔)

これら八枚の摺箔裂袋は、写真の向って左側が口(縫い合わせや輪奈でないあい
ている部分)で、何れも織耳が用いてある。大きさは幅(あいている口の左右方向)
が一三・七センチ前後、深さが一二・三センチ前後である。この大きさは鍬形等
を収納する蒔絵箱に丁度入る大きさであり用途は不詳である。鍬形二種は双方と

もにその中央で嵌め込んで左右相様の形を作るようになっており、収納時は左右
を二つに分けて納めるようになっていた。前述したように今回始めて見た時は八
枚の袋の上に、真向と鍬形の左右に分けたのが六個の計七個が重ねて納めてあ
った。最上層にあった袋(イ)はそれら金属製鍬形類による摩擦のためか(ロ)~(チ)に比し
摺箔が著しく剥落しており、袋の縫糸も損じている。当初これらの袋は鍬形類を
各一個宛入れるためのものであったかも知れないが、(ロ)~(チ)までの袋の摺箔が殆
ど当初のままのような状態で今日にあるのを見ると実際にはそのような用いられ
方はしていなかったようである。

それと、これらの摺箔はこの袋のために新に作ったものではなく、能装束の摺
箔で多少損傷のあるものを解き、剥落のない部分から文様を適宜按排して作られ
たものと思われる。^{註32}

(裂地の地合)

八枚とも練緯で、経糸は細く(イ)は(ロ)~(チ)ほどには細くない)、密度は一センチ間
に、経糸は四四本前後、緯糸は四四越前後。地質は(イ)、(ロ)~(チ)の三種
に分けられるようである。

註

10 金糸が絵緯の一つとして織り込まれている縞珍。縞珍は縞子地に絵緯で多色な色文様
を織り出した絹織物で、もとは中国からの舶載品。わが国では帯地に多く用いられる。
11・12・13 紅染研究家の鈴木孝男氏に観察していただいたところによる。極薄紅は白に
近いといえるようなほんのりと紅のかかった色。

14 地組織を構成する糸ではなく、文様を織り出すための緯糸。

15 近江産の高宮麻のことで、本文二〇頁上段参照。

16・17 これらの付紙の文字には難解な箇所があったため書道史専門の田村悦子当研究所
主任研究官に解説を依頼した。

18 絹織物の一種、もとは中国からの舶載品で薄地の琥珀織。わが国でも天和年間に西陣
で始めて織られたという。先練先染の平組織の織物で、経糸が密、緯糸は比較的太く、
低い緯畦がある。

19 西洋服飾史研究家の丹野郁琦玉大教授にうかがったところによる。

20・21 紅染研究家の鈴木孝男氏に観察していただいたところによる。

22 美術研究二二三号の拙稿「伝上杉謙信所用帷子四領——伝上杉謙信・景勝所用服飾類
調査報告三——」参照。

23 美術研究二一九号の拙稿「上杉家伝来鎧下着・着込み・頭巾等四領二個 上——伝

上杉謙信・景勝所用服飾類調査報告六——」参照。

24 縫目及び裂の表裏の関係が立襟になるよう仕立てられている。

25 この紐通し穴は前身頃も後身頃も織耳の個所なので、くけたりせずそのままにしてある。

26 日本の袴の中では指貫に多少似た形であるが、西洋式（南蛮式）の曲線裁断を採り入れた袴で裁着袴（たっつけ袴）とも裾細ともいう。

27 仕立て方、縫目の関係で立襟と認められる。

28・29 註25と同様。

30 これまでに見た紗綾は、何れも必ず地紋に紗綾形があった。地紋に紗綾形のない紗綾は今回の紀州東照宮服飾類調査で始めてである。

31 これまでに調査した紗綾の遺品資料は、身幅が四〇センチ前後ある小袖や胴服に使用されているものも、片側が織耳であっても必ずもう片方の側が裁ち目であったから紗綾の裂幅は不詳のまま、それを知ることが長い間の念願であった。

32 山辺知行多摩美大教授に、この摺箔裂の袋の用途やもとは如何なる摺箔裂であったそうか等に関し御意見を賜った。